中華民国期の民衆教育は民衆に何を教えたか？
―民衆教育の教科書に対する内容分析から―

万　　静嫻

キーワード：民衆教育、民衆教育教科書、社会教育史、中国教育史

【要　旨】教科書は、教育側が追求する社会や個人像の創出という目標を反映するものである。そこで、中華民国期に展開された民衆教育の性格を理解するために、当時の教科書の検証は不可欠であると考える。本稿では、中華民国期に使用されていた民衆教育の教科書を分析し、当時の民衆教育は民衆に何を伝えたのかということに焦点を当て、民衆教育の具体的な教育内容や、望んでいた国民の姿を明らかにしたい。

1928年から新中国成立までの間に、数多くの民衆教育教科書が出版されたが、民衆教育教科書の内容は大きく変化した。1930年代初頭において読み書き能力の育成を重要視した民衆教育教科書は、徐々に公民教育の要素が強くなっていった。1936年、国民政府教育部が民衆教育教科書を改訂し、『民衆学校課本』という新たな教科書が登場した。

『民衆学校課本』は「民衆に公民として必要な知識と技能を習得させる」という教育目標に基づいて編成され、民衆の民族意識・愛国心の醸成を中心に、歴史や地理、衛生、自然など幅広いテーマの内容が取り上げられている。しかし、『民衆学校課本』に登場した歴史上の人物の殆どは愛国英雄であり、日常生活の内容としては民衆の生活様式を国民政府が求める価値規範に合わせるものが多かった。当時の教科書は、精緻に内容を選別、編成することによって、民衆の価値観を国民政府の価値観に一致させるように教育・教化を行おうとしたことが読み取れる。

識字率が極めて低かった当時の中国社会では、全国的な範囲で普及していた民衆教育施設で使われた『民衆学校課本』などの識字課本は、当時の中国におけるナショナル・アイデンティティの創出・維持、とさらにそれを強化するための重要な手段として用いられてきたことが窺える。このような教科書を通して、民衆は国旗や国歌、国暦、国慶など国のシンボルを学習・体得して、共同の中華民国のアイデンティティを形成したのである。

1．問題提起

1928年、北伐（国民党による全国の統一を目指した戦争）の完成に伴い、南京国民政府は基本的に全国を統一した。翌年、国民党第三次全国代表大会においては、中華民国の教育宗旨を「三民主義を基礎として、人民の生活を充実させ、社会でよく生存できるようにし、国民の生活を発展させ、民族の生命を長く保つことを目的とし、努めて民族の独立と民権の普遍化、及び民生の発展を期し、もって世界の大同団結を促進する」と規定した。ここからは教育における三民主義（民族・民権・民生）という国民党政権のイデオロギーを強調する姿勢が見られる。

また、その時期においては、ばらばらでまとまりのない民衆を近代国家に相応しい国民に教育、教化する動きが見られた。具体的には、1929年から一般民衆を対象とする民衆教育は中国各

地で広がり、活発な教育活動が展開された。そして1934年までに、既に多くの民衆教育施設が整備されていた。従来の図書館、体育場、民衆教育館、義務学校、平民学校、博物館に加え、新たな民衆図書館、民衆学校、郷農学校、農民班、農村工芸伝習班、合作社訓練班、工人学校、民衆茶園、民衆病院、農民教育館、郷村改進会、国民補修学校などの施設が立ち上げられた。さらに、これらの施設では民衆教育に関する多種多様な教育活動が取り組まれた。例えば1933年の時点で、江蘇省立徐州民衆教育館が展開した教育活動は約50種類に及んでいた[1]。

しかしながら、教育内容が充実する一方、雑多な民衆教育の施設、また数えきれないほどの教育活動において、「まるで霧の中に立たされているように、眩しくぼやけてしまい」[2]、内実として民衆教育は曖昧模糊なものとなっていた。民衆教育の実践活動を単に考察することから、民衆教育の内実やその目的を把握することは難しいと考えられる。従って、中華民国時期の民衆教育の性格を明らかにするために、民衆教育の教科書の内容を分析する必要があると考えられる。

これまで中華民国期の教科書に関する先行研究では、大里浩秋など（2010）『近代中国・教科書と日本』[3]や、鈴木正弘（2009）「民国期の歴史教科書におけるナショナル・アイデンティティの方向性―中等学校「中国史」教科書における総論部の分析―」[4]などがある。これらの研究は学校教育を中心に検討したものであり、歴史教科書や国語教科書を対象にして分析しているが、民衆教育の教科書についての研究は行っていない。そして、その時期の民衆教育に関する研究は、民衆教育館という教育施設についての研究が主流である。周慧梅（2012）『近代民衆教育館研究』[5]や、朱煜（2012）『民衆教育館与基層社会現代改造（1928－1937）』[6]は緻密な史料に基づいて、マクロの視点から民衆教育の時代変遷を検討した。また、ミクロの視点からの研究も多く見られる。例えば、李冬梅（2010）「抗戦前江蘇省立民衆教育館事業活働述評」[7]、孫一凡（2016）「江蘇省立徐州民衆教育館与近代徐海地区基層社会」[8]などが挙げられる。これらの研究は、１つの民衆教育館に焦点を当て、民衆教育館の内部統制や事業に重点を置いて論じていた。しかし一方、具体的にどのような教科書を使って、いかなる知識や技能を民衆に伝達したのかという民衆教育の内実に対する検討は不十分であると考える。

そのため、本稿では、1936年に出版された『民衆学校課本』を取り上げ、当時の民衆教育は民衆に何を伝えようとしていたのかということを解明し、民衆教育の具体的な教育内容や、国家が望んでいた国民の姿を明らかにしたい。

２．民衆教育教科書の出版状況

中華民国期の教科書制度は概ね、教科書審定制度を採用していた。教育部のほか、商務印書館、中華書局、世界書局といった民間の書局も教科書の出版に携わった。1928年から新中国成立までの間に、合計1659冊の教科書が出版された[9]。また、同時期には民衆教育の推進のために、数多くの民衆教育教科書が出版された。

表１　民衆教育教科書の出版状況

作者	書名	出版社	出版年	属性
河南省教育庁	河南民衆課本	商務印書館	1931年	行政組織
教育部	三民主義千字課	教育部	1933年	行政組織
上海市教育局	上海市民衆識字課本	商務印書館	1935年	行政組織
湖北省政府教育庁	民衆識字課本	商務印書館	1935年	行政組織
教育部	民衆学校課本	商務印書館	1936年	行政組織
魏氷心	千字課本	世界書局	1928年	教育団体
魏氷心	民衆千字課本	世界書局	1929年	教育団体
平民教育促進会総会	農民千字課	商務印書館	1929年	教育団体
胡知非、沈圻	民衆教育読本	新時代教育社	1929年	教育団体
暁荘学校	三民主義千字課	新時代教育社	1929年	教育団体
沈百英	識字課本	商務印書館	1930年	教育団体
平民教育促進会総会	市民千字課	商務印書館	1931年	教育団体
黎錦暉	平民千字課	中華書局	1931年	教育団体
甘豫源，王璋	生活化農民読本	江蘇省立教育学院	1934年	教育団体
秦柳方	民衆高級読本	江蘇省立教育学院	1934年	教育団体
陶行知	老少通千字課	商務印書館	1935年	教育団体
馬祖武	実験民衆読本	商務印書館	1937年	教育団体

一方、1928年から数年の間に、民衆教育教科書の内容は大きく変化した。1930年代初頭においては、一般民衆の識字率が20％未満という状況に合わせて『三民主義千字課』（教育部編、1933年）や『農民千字課』（中華平民教育促進会編、1931年）など、「千字課」という民衆の識字量に主眼を置いた教科書が多かった。しかし、このような識字量を達成するために、長く複雑な文章が多く載せられており、民衆の教育レベルや学習意欲と合致しない内容も多く見られた。そして国共内戦や日中戦争が切迫しつつあったその時期に、国民政府が求める教育目標や教育内容も変わってきた。

1934年、民衆教育を専門に研究する学術誌『教育与民衆』には、湖南省教育庁庁長である張炯による「民衆学校課本改編之我見」という文章が掲載された。この文章の中では張炯は、それまでの識字量に偏った民衆教育教科書を批判し、これからの民衆教育教科書は、「文字数の多さにも関わらず、意義のある教育内容を最も重要視すべきである」[10]と述べている。そして「意義のある教育内容」について、張炯は「民衆がその教科書の内容を習得した後、中国とはどのような国か、個人と社会の関係についていかに考えるべきか、個人と国家の関係についていかに考えるべきか、国難の状況はどのようであるか、未曾有の国難の中で個人はどうあるべきかを理解すること」と述べているように、個人の中国社会との関わりに着目して民衆に考えさせる公民教育こそが、意義のある教育であると捉えていた。

このようなことから、それまでの『千字課』のような民衆の読み書き能力の育成を重要視した民衆教育教科書は、徐々に公民教育の要素が強くなっていったことが読み取れる。1936年、民衆教育館という民衆教育の中心施設の展開が頂点に達していた際に、国民政府の教育部は民衆教育教科書を改訂し、『民衆学校課本』（1936年）という新たな教科書が登場した。この教科書には漢字の読み書きに関する内容のみならず、政治や科学など近代社会の公民として必要な知識も網羅した。『民衆学校課本』は民衆教育館や民衆学校などの教育施設で中心的な教材として使われ、一般民衆を教育・教化する役割が期待された。

3.『民衆学校課本』の概要説明

ここではまず、『民衆学校課本』の教育目標や目次を踏まえて、その内容を整理する。1936年、『民衆学校課本』は「民衆に公民として必要な知識と技能を習得させる」という教育目標に基づいて編成され、民衆の民族意識・愛国心の醸成を中心に、歴史や地理、衛生、自然など幅広いテーマの内容が取り上げられている。その内容は80単元から構成され、一般の教科書より充実していた。合計４冊が発行された。

また、『民衆学校課本』は主に民衆学校を代表とする民衆教育施設に使用されたため、その内容編成は民衆学校の学習進度に合わせて設定された。１冊の内容は１ヶ月の学習期間で習得し、合計４ヶ月で４冊が履修できるように計画された。教科書の難易度については、第１冊の本文の文字数は80字以内、第２冊の本文の文字数は150字以内、第３冊の本文の文字数は200字以内、第４冊の本文の文字数は240字以内と設定された。その目次は以下の通りである。

表２　『民衆学校課本』の目次

第一冊	1	中国人	国旗	国貨	読書好	幹	復習1
	6	我が家	銭大友	領収書	空気	国暦	復習2
	11	職業	書付	道路修築	植林	クイズ	復習3
	16	孫中山先生	首都	服装	食事	住宅	復習4
第二冊	1	ハエや蚊	禁酒・禁煙	健康な体	水の変化	雷	復習1
	6	七十二烈士	国慶	革命の理由	自衛	長城と運河	復習2
	11	消防	合作社	田華の村	老耄	誰もが不可欠	復習3
	16	農工商の互助	交通の進歩	我が国の発明	越国の雪辱	団結	復習4
第三冊	1	太陽・月・地球	日食・月食	孔子	抵抗	岳飛	復習1
	6	三民主義	国民の義務と権利	各級政府	中華民族の光栄	我々の国家	復習2
	11	国内の遊歴1	国内の遊歴2	地球の水・陸	違う肌の色	世界一周	復習3
	16	賀状	招待状・借用書	伝染病	孫家村	皆の福利	復習4
第四冊	1	動物・植物・鉱物	汽力と電力	団体の組織	法律常識	戚継光	復習1
	6	我が国の道徳	新生活	土地所有権の平均	資本の節制	農地売買契約書	復習2
	11	民国以前の国恥	民国以降の傷	不平等条約	救急法	好家庭	復習3
	16	新たな道	国防	防空演習	花木蘭	卒業式の講演	復習4

そのテーマを見ると、『民衆学校課本』は幅広いテーマに触れていたことがわかる。「中国人」、「国旗」、「国貨」といった国家・政党に関する内容のほか、「空気」、「ハエや蚊」、「孔子」、「岳飛」といった一般教養の内容、さらに「食事」、「住宅」、「禁酒・禁煙」、「健康な体」といった個人の実生活につながる内容も多く見られ、多様であるといえる。

また、前述のように、『民衆学校課本』は「民衆に公民として必要な知識と技能を習得させる」ことを教育目標として編成された。『民衆学校課本』が求める公民として必要な知識と技能にはおおむね、①国家・政党：国家・政党に関わる知識及び軍事訓練に関する技能の習得、②一般教養：社会や地理、歴史に関わる知識の習得、③個人生活：生計や衛生、職業、地域生活に関する知識や技能の習得、という３つの種類があると考えられる。

表３　『民衆学校課本』の題目整理

テーマ	題目
国家・政党に関わる内容	中国人、国旗、国貨、国暦、孫中山先生、国慶、革命の理由、我が国の発明、三民主義、国民の義務と権利、各級政府、中華民族の光栄、我々の国家、団体の組織、法律常識、我が国の道徳、土地所有権の平均、資本の節制、民国以前の国恥、民国以降の傷、不平等条約、新たな道、七十二烈士、自衛、団結、抵抗、国防、防空演習（28課）
一般教養に関わる内容	空気、ハエや蚊、水の変化、雷、老耄、交通の進歩、太陽・月と地球、日食・月食、地球の水と陸、違う肌の色、動物、植物と鉱物、汽力と電力、首都、長城と運河、越国の雪辱、孔子、岳飛、国内の遊歴１、国内の遊歴２、世界一周、戚継光、花木蘭（23課）
個人生活に関わる内容	読書好、幹、我が家、銭大友、領収書、職業、書付、道路修築、植林、クイズ、服装、食事、住宅、禁酒・禁煙、健康な体、消防、合作社、田華の村、誰もが不可欠、農工商の互助、賀状、招待状と借用書、伝染病、孫家村、皆の福利、新生活、農地売買契約書、救急法、好家庭、卒業式の講演（30課）

表３のように、『民衆学校課本』においては、国家・政党に関わる内容は28課、一般教養に関わる内容は23課、個人生活に関わる内容は30課であり、各部分の量はほぼ同じである。次に、各部分の具体的な内容を踏まえて、『民衆学校課本』に潜む価値観やイデオロギーを明らかにする。

４．『民衆学校課本』の内容分析

(1) 国家・政党に関わる内容

民衆の民族意識や愛国心の育成という『民衆学校課本』の基本目標を実現するためには、国家・政党に関わる内容が最も重要であったと考えられる。『民衆学校課本』においては、国家・政党に関わる内容は合計28課がある。その内容をさらに細分化すると、国家に関わる内容は18課、政党に関わる内容は10課であり、国家に関する内容がはるかに多かったといえる。

■ 国家（18）：中国人、国旗、国貨、国暦、国慶、我が国の発明、国民の義務と権利、中華民族の光栄、我々の国家、我が国の道徳、団結、抵抗、民国以前の国恥、民国以降の傷、不平等条約、新たな生路、自衛、国防

■ 政党（10）：孫中山先生、革命の理由、三民主義、各級政府、団体の組織、法律常識、平均地権、節制資本、七十二烈士、防空演習

さらに、国家に関わる内容は教科書の冒頭から連続で登場している（第１冊第１課「中国人」、第２課「国旗」、第３課「国貨」）。その内容には、中国に対する帰属意識も含む中国のナショナル・アイデンティティを創出しようとする姿勢が読み取れた。第一課「中国人」、第２課「国旗」の具体的な内容は以下である。

第１冊第１課「中国人」においては、中国人に対する説明や、中国人の居住地域また生活事情などは述べられず、この国に生きている「私」、「あなた」、「彼」の「中国人」という共通のアイデンティティを何度も繰り返し、そして「私たち中国人は、中国を愛する」と述べ、愛国心を強調している。

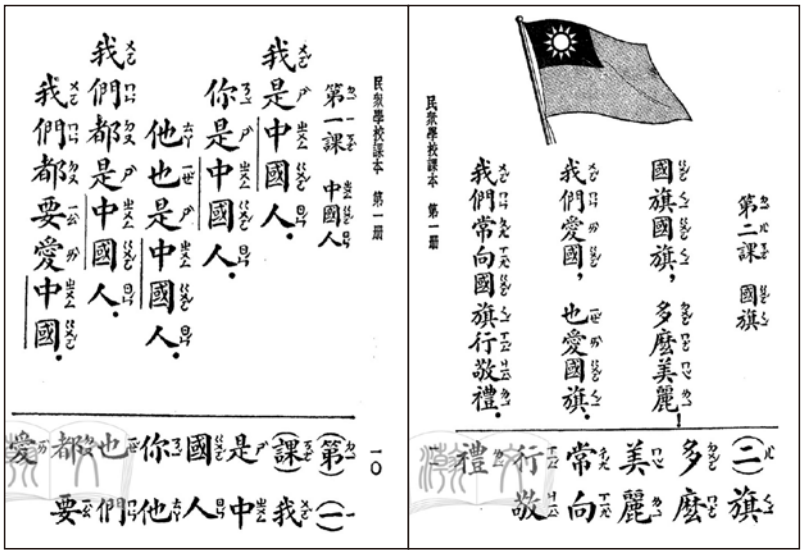


図１『民衆学校課本』第１冊第１課「中国人」、第１冊第２課「国旗」
（訳：第１冊第１課「中国人」：私は中国人。あなたは中国人。彼も中国人。私たちは中国人。私たちは中国を愛する。第１冊第２課「国旗」：国旗、国旗、なんと美しい！私たちは国を愛し、国旗も愛する。私たちは国旗に敬礼する。）

これと同じように、第２課「国旗」においても国家への愛、また国旗への愛を示している。国旗はなぜこのようにデザインされたのかというような説明よりも、「私たち中国人は国を愛し、国旗も愛する」という態度や価値観的なものを強調するフレーズが反復されている。このような文章から、国旗は国家の象徴であり、民衆が国家を愛するならば国家の象徴である国旗を愛さなければならない、というポリシーが民衆に伝えられた。

また、この部分では、表面的には国家に関する内容は政党に関するものよりはるかに多くなっているが、その中には国家か政党かの判断が難い内容も少なくない。例えば、前述に登場した国旗、つまり青天白日満地紅旗は、中国革命同盟会（国民党の前身）の旗として使われた青天白日旗を基にデザインされたものである。青天白日満地紅旗をめぐって、当時は大きな論争が起きていた。

1911年の辛亥革命後、初代中華民国大総統となった袁世凱は「五色旗」を国旗に採択した。そ

の五色は、赤＝漢、黄＝満、藍＝蒙、白＝回、黒＝西蔵の五族共和を意味する。1912年から1927年までの北京政府期において五色旗は中華民国国旗として使われ、各界から認知されていた。

一方で国民党の創設者、指導者である孫文は長年にわたって五色旗を全面的に否定し[11]、先烈の血に育てられてきた青天白日満地紅旗の正当性を訴えた。1928年、北伐の勝利によって国民党が政権を獲得した。同年12月17日、国民政府は「中華民国国徽国旗法」を公布し、中華民国の国旗は五色旗から青天白日満地紅旗となった。青天白日満地紅旗の青・赤・白の３色は国民党の基本綱領である三民主義に由来し、青は民権主義で正義を、赤は民族主義で自由と独立を、白は民生主義で友愛を象徴する。また左上に描かれている青天白日の紋章は中国国民党の党章にも使われていた。

五色旗

青天白日満地紅旗

図２　五色旗と青天白日満地紅旗

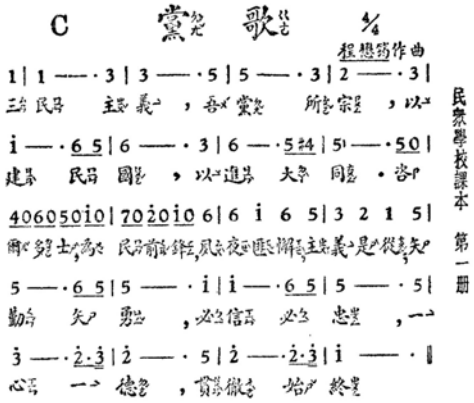
このことについて、小野寺史郎は著書『国旗・国歌・国慶：ナショナリズムとシンボルの中国近代史』の中で、青天白日満地紅旗という国旗は不可避的に「中華民国の国旗」であると同時に「国民党の国旗」であったと指摘した[12]。そして国民政府のナショナル・シンボルの政治は、国民党・三民主義と分かちがたく結びつけられた国旗である青天白日満地紅旗の下で、社会的諸団体に国家への忠誠を誓わせるのと同時に、それらを党のイデオロギーの統制の下に置こうという試みと結びついていた点に特徴があった[13]。

その意味で、『民衆学校課本』の第１冊第２課「国旗」にある「私たちは国を愛し、国旗も愛する」というフレーズの背後には、「私たちは（国民党が指導する中華民）国を愛し、（三民主義という国民党政権が提唱したイデオロギーを反映した）国旗も愛する」、という意味が含まれていたものと思われる。このように、教科書によって民衆の愛国心を育てると同時に、国民党政権のイデオロギーに対する帰属意識も密かに育成しようとしたものと推測できる。

さらに、『民衆学校課本』第１冊の末尾では国民党の党歌が取り上げられている。この党歌は、当時は国歌としても使われていた。そして、前述の国旗をめぐる論争と同様に、党歌には党と国の曖昧化、あるいは混同が再び見られた。

当時、国民党の党歌は国歌としても使われたが、その歌詞は冒頭から「三民主義は、我が党の尊ぶところである」であり、明らかに国民党の政治的イデオロギーを強調する内容が見られる。このような内容は国歌として相応しいかどうかは疑問であるが、それにもかかわらず、この党歌は1930年３月から代用国歌に採用された。このことに対して、『中央日報』という国民党の機関紙は「党が即ち国家であり…国歌に相当するものとしての党歌」というように国歌の党歌化を正

当化した[14]。そして、7年後の1937年6月、中央実行委員会常務委員会は中国国民党党歌を中華民国国歌とすることを決定した。



（翻訳）第1冊　党歌

三民主義は、我が党の尊ぶところであり、
それによって民国を建設し、大同に進む。
多くの志士よ、民衆の先鋒たれ。朝夕怠る
ことなく、主義に従え。
よく勤め勇気を奮い、必ず信を守り、忠を
尽くし、心を一つにし、終始貫徹せよ。

図3　『民衆学校課本』第1冊に掲載された「党歌」

こうして、国旗や国歌の「党化」を通して、当時の愛国と愛党は事実上、同一化されるようになった。そして愛国心の育成とともに、愛党心が暗黙知として一般民衆に内面化されるようになったと考えられる。

(2) 一般教養に関わる内容

次に、『民衆学校課本』に掲載された一般教養に関わる内容を確認する。『民衆学校課本』においては、自然、科学、社会、歴史などの一般教養の内容が多くあった。特に「太陽・月と地球」、「日食・月食」、「地球の水と陸」、「違う肌の色」という、国境を超えた世界や宇宙に関する文章も教科書に掲載し、教科書を通して、民衆の視野を広げていくための努力が読み取れる。

本論ではここで、一般教養に関わる雑多な内容から、『民衆学校課本』において世界各国がどのようなイメージで描写されているのか、またどのような歴史上の人物が教科書に登場するのか、という2つの問題設定により、一般教養に関わる内容を考察していきたい。

教科書に書かれる世界各国のイメージに関しては、1935年を境界線とした前後でかなりの違いが見られる。ここでは、1934年に出版された『民衆高級読本』（江蘇省立教育学院編）と、1936年に出版された『民衆学校課本』という2つの教科書の内容を比較しながら、その違いを明らかにする。

まず1934年の『民衆高級読本』の内容を確認する。この教科書の第2冊には「中国と各国」という文章がある。その中では、世界各国のイメージは以下のように描写されている。

我が国は土地が広く資源が豊かで、世界強国になるはずが、民衆が怯懦者であり、列強に敗戦を余儀なくされた。日本は我が国の東三省を奪い、ソビエト連邦はモンゴル族を扇動し、

利益を得た。イギリスはチベットを惑わし、フランスやアメリカは我が国の属国を奪った…（下線筆者）

この内容のように、1934年の教科書においては、日本やソビエト連邦、イギリス、フランス、アメリカ諸国による侵略の事実や、それを批判する記述が殆どであった。その中で中国の他国との対立関係が強調され、世界各国が主にマイナスなイメージで描かれている。つまり教科書にある外国に対する記述については、排外的な言説が目立った。当時では、このような記述は民衆の愛国心を激励するための「国恥教育」の一環として用いられた。

こういった表現は、中国の日本を含む列強諸国から受けた侵略の事実につながるものだが、日本を初め列強各国はこのような記述を激しく非難した。砂山幸雄は「「支那排日教科書」批判の系譜」の中で中国の排日教科書に対する日本側の動きを整理した。それによると、満州事変後の塘沽停戦協定の交渉過程において、日本側は「日本政府及び国民の誤解を一掃する為には」、「排日団体、党部の解散、排日教科書の廃止」[15]などを国民政府に要求した。そして1935年に、国民政府は広田外相が主張した「和協外交」に応えて、教科書審査にあたる国立編訳館に「以後、小中学校の教科書審査にあたり、国恥教材は実の正確な叙述と健全な民族意識の要請に注意し…恨みを単純に煽動するような言辞を使わせないように」[16]と命令した。

砂山幸雄は、日本軍部の意図として、排日教科書に対する批判はあくまでも侵略のための１つの口実に過ぎない[17]と指摘したが、1935年以降に出版された中国の教科書では、掲載される世界各国のイメージはかなり変わってきた。ここでは1936年に出版された『民衆学校課本』の第３冊第15課「世界一周」の内容を取り上げて、世界各国の変化したイメージを確認する。

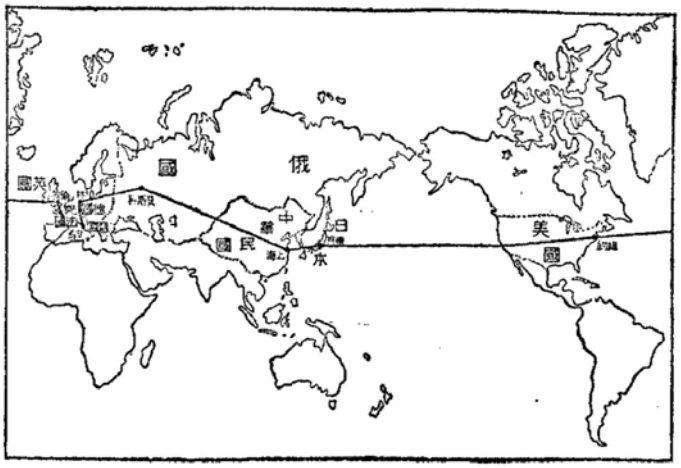


図４　『民衆学校課本』第３冊第15課「世界一周」の挿図

「世界一周」という文章は、１人の飛行家を主人公として、彼が世界一周の旅に日本やアメリカ、イギリス、フランスなどの国を訪れ、各国の風土や特徴を紹介するという内容である。各国の具体的なイメージは以下の通りである。

■ 日本：我が国との関係が最も複雑であり、中国人の心に常に存在する国
■ アメリカ：裕福、機械が進化し続け、農作業の際にも機械を使用する国
■ イギリス：商業は発達しており、世界各地に海外領土を持つ国
■ フランス：賑やかな首都を持つ国
■ イタリア：史跡が多い国
■ ドイツ：工業化が進展した国
■ ロシア：最近工業国となった国

ここから見ると、『民衆学校課本』での各国に対する評価は以前と大きく変わっている。従来の教科書にあった他国との対立関係はほとんど消し去られ、代わりに価値中立的に世界各国の事情や特徴を紹介するようになった。しかし、これは決して、教科書においては国恥教育や愛国教育が存在しないということではない。前述の国旗・国家の内容がその一例だと言える。また、社会・歴史に関わる内容においては、どのような歴史上の人物を選出するのかということにも、愛国教育の性格が見て取れる。

『民衆学校課本』では、越王勾践（第２冊第19課）、孔子（第３冊第３課）、岳飛（第３冊第５課）、戚継光（第４冊第５課）、花木蘭（第４冊第19課）といった歴史上の人物が取り上げられた。そのうち、孔子を除いた４人はいずれも救国の英雄、義士として高く評価されている人物である。

表４　『民衆学校課本』に登場した歴史上の人物

登場人物	個人経歴
越王勾践	春秋時代、越国は呉国に打ち負かされていた。越王勾践は薪の上に眠り、苦い胆を舐め、自分に恥辱を忘れさせないようにした。十年にも及ぶ苦難に耐え、越国はついに呉国を打ち負かした。
岳飛	南宋の傑出した民族的英雄である。彼は金との攻防戦に活躍し、兵士と人民を愛護した。しかし宰相秦檜は岳飛の出世を妬み、岳飛に無実の罪を着せ、獄中で毒殺した。
戚継光	明代の武将である。戚継光は浙江で倭寇防衛にあたった。旧軍隊の素質不良をみて浙江の義烏県の農民や鉱徒を召募して訓練した新軍は戚家軍と称され抗倭の主力となった。
花木蘭	中国の歌や伝説の中で語られる有名な女将軍である。北魏時代、北方民族が侵入を繰り返したため、北魏政権は家から一人男子を徴兵し前線へと向かわせました。花木蘭が病弱な父親の代わりに男装して戦場に向かい、勇敢に戦い抜いて勝利をおさめ、ふるさとに戻って親孝行をした。

表４に示したように、『民衆学校課本』においては、国恥を忘れずに外敵と戦い、自分の国を守ろうとする中国の歴代王朝にいた救国の英雄が次々と登場した。1931年９月に勃発した満洲事変以降、日中間の衝突が激化する中、中国では帝国主義の支配から民族独立及び民族統一の達成を求めるようになった。このような国の要請は教科書の編成にも影響を与えた。「中国人は中国を愛する」というように、愛国についてのことを明白に教科書の中で記述するのはもちろん、歴史上の人物の選別という潜在的なところにも、民衆の民族意識を奮い立たせ、中国民族運動にお

ける彼らの責任の自覚を促す姿勢が読み取れる。

(3) 個人の生活に関わる内容

最後に、『民衆学校課本』の個人の生活に関わる内容を確認したい。個人の生活に関わる内容はおおむね、①実用的な内容と、②倫理的な内容という２つの類型に分けられる。

表５　個人の生活に関わる内容

実用的な内容	実用文と説明文（６課）	領収書、書付、クイズ、賀状、招待状と借用書、農地売買契約書
倫理的な内容	団結・社会参加（12課）	道路修築、植林、消防、合作社、誰もが不可欠、農工商の互助、皆の福利、我が家、田華の村、孫家村、好家庭、新生活
	衛生・健康（10課）	服装、食事、住宅、禁酒・禁煙、健康な体、伝染病、孫家村、新生活、救急法、好家庭
	勤勉・節約（３課）	幹、銭大友、職業
	好学（３課）	我が家、読書好、卒業式の講演

『民衆学校課本』の中では、この部分の内容は民衆の日常生活と最も密接に繋がっている。しかしながら、具体的な内容については、書付や領収書の書き方のような、民衆の日常生活ですぐに使用できる実用性の高い実用文と説明文（６課）は少なかった。むしろ、○○すべきという上から民衆の人間性や生活様式を規定する倫理的な内容（24課）が極めて多く見られる。

そして、倫理的な内容においては、団結・社会参加が12課、衛生・健康が10課、勤勉、節約は３課、好学は３課であり、団結・社会参加や衛生・健康といった精神に関わるものが最も重視されている。団結・社会参加に関しては、第３冊第20課「皆の福利」において、以下のような対話があった。

（前略）

呉：御地には各種の公共事業が展開され、本当に模範都市です！公共の場は非常に綺麗で公園の花木も美しいです！

張：まだまだです。

呉：御地の遊園地や映画館、駅、道路には、皆さんは公序良俗を守って、なかなか珍しいです。

張：そうでもありません。皆さんは、公のためにつくし、公物を大切にし、公序良俗を守った結果、自分も公共も利益を得ました。（下線筆者）

この対話の中では、「公」や「公共」、「公序」、「公物」というキーワードが何回も繰り返して用いされる。しかしながら、「公」の概念については、現代に生きている人々には理解は難しくないが、当時の中国人にとっては決してそうではなかった。

その理由については、まず、従来の中国の公概念とは、「天、自然、条理、多数、均、つながりの共同、利他、調和など、さまざまなアスペクトを内包している概念」[18]であり、近代社会か

ら生まれた「公共」の公と必ずしも一致しているとは言えなかったことがある。

また、中国の従来の公概念にしても、それは士大夫や知識人の頭脳で醸成され、継承されてきた治世の観念、秩序の思想といったような永遠の理念であるため、一般民衆の現実生活そのものの直接的な反映ではなかった[19]。つまり一般民衆にとっては、国家の公も天下の公も、あるいは国民の公も、遠い空の上のことでしかなかった。このような「公」に対する認識が薄い、あるいはそもそも「公」に対する認識がない民衆に対して、当時の教科書では「皆の福利」というような内容を通して、「公共」という近代的な概念を植え付けようとしていたことが読み取れる。

また、『民衆学校課本』に提起された団結、衛生、健康、勤勉、節約、好学といった生活の模範は、実は1934年に国民政府が提唱した新生活運動という政治運動に関連している。新生活運動とは、「礼義廉恥」という中国の伝統道徳を基準とし、一般民衆の生活様式と社会倫理を改進する運動である。国民政府はこのような政治運動を通して、「粗野卑陋」の状態に陥った国民の生活に規律、清潔、整頓を課すことで国家と民族の「復興」を期待した。

こういった新生活運動の理念は『民衆学校課本』の内容にも現れている。ここでは、第４冊第７課「新生活」を一例として、その内容を紹介する。

「新生活」
我々は前途に光明を見いだす。
衣食住の全ては面目一新された。
斉整、清潔、簡単、質素、そして確実、迅速。
礼義廉恥を覚えよう！
礼を持って人を遇する。
義を持って事を制する。
廉を持って物を接する。
国家と個人の恥を銘記する。
悪習を規制し、良習を養成する。
大衆の力量で新たな生活を整える。
この新たな生活から民族の復興が実現できる。

この「新生活」という文章の中には、新生活運動の基本的な精神である「礼義廉恥」、そして実施原則である「斉整、清潔、簡単、質素、確実、迅速」がそのまま用いられている。新生活によって「民衆の復興が実現できる」、「前途に光明を見いだす」というような記述から、民衆の新生活の価値規範に基づいた生活様式を求めていたことがわかる。このような内容から、国家が望んだ「国民」の姿も浮かび上がってくる。つまり新生活運動に提唱されるように、礼義廉恥を持ち、斉整、清潔で生活を送り、団結して民族の復興が実現できる者は、当時の国民政府が求める国民像だと言える。

５．考察：教科書と「想像の共同体」の創出

アメリカの政治学者ベネディクト・アンダーソンは著書『想像の共同体：ナショナリズムの起

源と流行』[20]において、ナショナリズムの起源と形成過程を歴史的に述べた。アンダーソンによれば、通常個人にとって外在的で拘束的に感じられるナショナリズムやナショナリティという概念は、むしろ逆に人々がそれを想像するプロセスに依拠して再構成され、人々の相互作用によって作り出された「仮想的存在」である。

その中で、民衆に共同体意識や国民意識を生み出させる媒体として機能する言語は、共同体の形成に重要な役割を果たす。したがって資本主義による大量の出版物（特に新聞・小説など）はこういった統一化された言語の形成につながるものであり、出版物は「想像の共同体」を作る際に最も必要な道具であるとされた。

一方、当時の中国は識字率が極めて低く、新聞や小説といった共同体意識を創出する媒体はあまり機能していなかった。その代わりに、全国的な範囲で普及していた民衆教育施設で使われた『民衆学校課本』などの識字課本は、当時の中国におけるナショナル・アイデンティティの創出・維持、とさらにそれを強化するための重要な手段として用いられてきたことが窺える。このような識字のための教科書を通して、民衆は国旗や国歌、国暦、国慶など国のシンボルを学習・体得して、共同の中華民国のアイデンティティを形成した。

しかし本稿で論じたように、その時期の民衆教育の教科書に記述された内容を確認すると、『民衆学校課本』に掲載された中華民国に関する内容には、国民党政権のイデオロギーが混在していた。民衆が国旗や国歌などの中華民国のシンボルを受け入れ、中華民国に対する一体感が醸成される一方、この一体感には、「国民党政権の指導のもとでの中華民国」のニュアンスが含まれていたと考えられる。

また、『民衆学校課本』の中では、政治に関わる内容のほか、一般教養や日常生活の内容も充実していた。しかし、歴史上の人物の殆どは愛国英雄であり、日常生活の内容としては民衆の生活様式を国民政府が求める価値規範に合わせるものが多かった。当時の教科書は、精緻に内容を選別、編成することによって、民衆の価値観を国民政府の価値観に一致させるように教育・教化を行おうとしたのである。

しかし前述のように、民衆教育教科書の出版に当たっては教育部のみならず、民衆への教育実践を行っている各教育団体も教科書の編成に携わった。それぞれの主体が出版した教科書の目的やその内容には違いがあるが、本稿ではこれらの内容について論じていない。今後の課題として、行政以外の教育団体が出版した民衆教育の教科書に対する分析を行い、その時期の民衆教育の内実をより多面的に検討したい。

注

1　「本館之工作概要」、『江蘇省立徐州民衆教育館周年記念特刊』、1933年、99～263頁。
2　高陽『民衆教育』、商務印書館、1933年、44頁。
3　大里浩秋等『近代中国･教科書と日本』、研文出版、2010年。この著書は、緻密な史料に基づいて、中華民国期の歴史教科書、国語教科書、地理教科書、修身教科書に対する内容分析から、中国の領土空間、国恥、日中関係、ナショナリズムなどの諸問題を論考した。中華民国期の中国の教科書に関する代表的な一冊である。

4　鈴木正弘「民国期の歴史教科書におけるナショナル・アイデンティティの方向性―中等学校「中国史」教科書における総論部の分析―」、歴史教育史研究、2009年第6巻、19～36頁。
5　周慧梅『近代民衆教育館研究』、北京師範大学出版社、2012年。
6　朱煜『民衆教育館与基層社会現代改造』、社会科学文献出版社、2012年。
7　李冬梅「抗戦前江蘇省立民衆教育館事業活働述評」、『揚州大学学報（人文社会科学版）』、2010年第14巻第6期、90～95頁。
8　孫一凡「江蘇省立徐州民衆教育館与近代徐海地区基層社会」、『淮海工学院学報（人文社会科学版）』、2016年第14巻第11期、69～73頁。
9　これは、呉科達が国民政府の『教育部公報』、『申報』、そして国民政府が発行した審定教科書目録などの関連資料から整理した数値である。呉科達『臣民還是公民－教科書審定制度和思想道徳教科書（1902－1949）』、中国社会科学出版社、2013年、114頁。
10　張炯「民衆学校課本改編之我見」、『教育与民衆』1934年第6巻第3期、461～464頁。
11　その主な理由は、①清国の旧例では、海軍は五色旗を一・二品の大官の旗としていた。今満清の国旗を廃してその官旗を用いるというのは、体を失うことを免れない。②その意味を五大民族とするが、その分配して色で代表するのに、意味を取ることが確かでない。③すでに五族平等を言うのに、上下に配列するのは、階級があるようである。（出典：小野寺史郎『国旗・国歌・国慶：ナショナリズムとシンボルの中国近代史』、東京大学出版会、65頁。）
12　小野寺史郎『国旗・国歌・国慶：ナショナリズムとシンボルの中国近代史』、東京大学出版会、2011年、208頁。
13　同上、『国旗・国歌・国慶：ナショナリズムとシンボルの中国近代史』、222頁。
14　国史館審編処『国民政府档案（1）中華民国国旗与国歌史料』、国史館、2002年、367～369頁。
15　砂山幸雄「「支那排日教科書」批判の系譜」、並木頼寿他編『近代中国･教科書と日本』、研文出版、2010年、355頁。
16　「教育部関於我国中小学教科図書編審情形節略」、中国第二歴史档案館編『中華民国档案資料彙編』第五輯第一編教育（一）、江蘇古籍出版社、1994年、94頁。
17　前掲3、『近代中国・教科書と日本』、357頁。
18　溝口雄三『中国の公と私』、研文出版、1995年、84頁。
19　同上、『中国の公と私』、85頁。
20　ベネディクト・アンダーソン『定本　想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』、白石隆・白石さや訳、書籍工房早山、2007年。